特別レポート

ネット社会で問われる実店舗の役割
「健康フェア」でアピール

広がるドラッグストアの可能性と高まる期待

商圏内への利益還元やPRを目的に開催されてきたドラッグストア（DgS）の健康フェアが大きく色合いを変えている。かつてのサンプル配布、クーポン発行など賑わい性を演出する特典は影を潜め、自らの機能をしっかりアピールする方向へとスタンスが移りつつある。OTC医薬品のネット販売の帰趨が注目される中、リアル店舗の魅力をどこまで伝えられるか。正念場を迎えてDgS各社の危機感が表面化してきた。

アカカベ・皆川友夫社長（右）と、DgSのあり方を提唱する広島大薬学部・森川教授

アカカベ ヘルス&ビューティフェア 2013

反響を呼んだ「血液測定」

「血液測定」データに基づく相談サービス実施

大阪府北東部エリアでドミナント展開しているアカカベ（本社大阪府）の第11回「ヘルス&ビューティフェア2013」が4月20日、四条畷市の市民総合体育館サンアリーナ25で開催された。

例年この時期、顧客サービスの一環として行われ、同市も会場手配で優遇するなど地元を挙げてのイベントになっているが、今回、健康チェックコーナーにひときわ多数の人だかりができた。

広島大学薬学部による「血液測定」だ。

指先からごく微量の血液を採取し、卓上型の生化学検査測定器でHbA1c・血糖値、総コレステロール、中性脂肪、尿酸の値をチェックする。

仕掛け人は、広島大学大学院臨床薬物治療学研究室の森川則文教授（広島大学病院薬剤部副薬剤部長）。生活習慣病対策を視野に入れたフィールドワークを重ねる森川教授は「自分の検査値を知ることでセルフメディケーション意識が高まる。販売側もOTC薬やサプリメントの効果を把握できるエビデンスを持ってこそ自信を持って売れるのではないか。DgSが果たせる可能性は大きい」と医療費軽減効果も視野に入れ、薬局・ドラッグストアの薬剤師スタッフが日常の食生活や運動について指導した。

出展約100社のもと地元市民ら5000人が来場

広島大薬学部・森川教授 DgSの可能性提唱

この血液測定を通じたセルフメディケーションの取り組みは、サービス最適化の取り組みは、サ

点と位置づける。

血液採取は、専用器具でチクッと刺すだけ。相談者が自分で操作するため1回につき300例のデータを集められる。昨年だけで2000例を採取した（森川教授）と研究を深めている。

関西では初めてとなるこの試みはフェア当日、広島大学薬学部の学生8人と地元の大阪薬科大学からも8人が参加。6年制薬剤師の活躍するフィールドの広さについて学んだ。

ンキュードラッグ（本社福岡市）やCFSコーポレーション（本社神奈川県）などのDgSのほか、山口県防府市、広島県三日市市の薬剤師会・医師会などとも連携して各地で実施されている。「1時間当たり50人、イベント1回につき300例の